

さまー・ざ・ろっく！

Gaku0721

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

虹夏ちゃんがメインヒロインです。

とても拙い駄文ですか読んでもらえたら嬉しいです。

目次

初ライブ1!	1
初ライブ2!	6
反省会1!	10
バンドミーティング1!	15

初ライブー！

虹夏サイド

伊地知虹夏は悩んでいた。

「バンドメンバーが来ないっ…！」

ライブまであと2時間、知り合いを当たったり町中の人に声をかけてもヘルプのギターとキーボードが見つからない。

このままではせつかくのライブのチャンス逃してしまう。

「やっぱり、そんな直ぐにサポートは見つからないか…！」

そうポツリと独り言を発しながら近くの公園に目を向けてみるとブランコに座っているギターケースを持ったピンクジャージの少女とキーボードケースを枕にして寝ている青年が目に入った。

「そこで寝ているお兄さんとギターの子ちよつといいかなー！」

ギターの子はビクツと身体を震わせておずおずとこちらに視線を向ける。

一方、お兄さんは私の声で起きたのかむくりと眠そうにこつちを見してきた。

「今からライブがあるんだけどメンバーが足りなくて、今日だけサポートメンバーとして来てくれないかな！」

ぼっちside

バンドを組むと意気込んで高校入学から早1カ月。

後藤ひとりは早くも挫けかけていた。

「今日はいっぱいバンドグッズを身に付けて1日過ごしていたのに誰も話しかけてくれなかった…。」

「私のようなミジンコ以下の存在に気づいてくれる人は高校でもやっぱりいないのかな…。」

もう学校行きたくない

そう思いつめながらブランコを軽くこいでいると、1人の青年が目が入った。

(あの人こんな放課後の時間に1人で公園のベンチでぐっすり寝ている。)

(学校で友達がいらないからこの公園に来て1人で時間をつぶしているのかな…。)

(私と一緒にここに集う人たちは孤独を抱えているんだ。)

そのようなことを考えていると甲高い声が聞こえてきた。

「そこで寝ているお兄さんとギターの子ちよつといいかなー!」

「ヒイツツ!」

突然の大声に驚き、変な声を上げてしまった。

「私のような引きこもり予備軍が白昼堂々と遊具を占領してしまい申し訳ございません…orz。」

彼女の脳内では警察に捕まり、裁判にかけられ死刑を宣告されている走馬灯がよぎっていた。

このまま短い人生の幕が閉じると思いながら顔をゆっくり恐る恐る上げるとそこには金髪のサイドテールと首に巻いたりボンが特徴的な女の子がこちらを見ていた。

オリ主side

「2週間修理に出したキーボードがやっと帰ってくる」

そう意気揚々と小走りになりながら「rb・蒼山楽人 > あおやまがくと」は下北沢の楽器店に直行していた。

「すみません。キーボードの修理を依頼した蒼山です。」

店員にそう伝えると愛しの相棒が戻ってきた。

2週間ぶりの相棒に触れて動作に問題がないか確かめる。

「もしよかったら何か一曲弾いてみませんか?」

「いいですよ。何かリクエストはありますか?」

「では、official 髭男dism のUniverseをお願いしてもいいですか?」

「すみません。聞いたことがなかったので一回聴いてからでもいいですか?」

「!?まさか耳コピできるんですか」

「一応、だいたい曲は一回で弾けるようになりますよ」

ローディング中…

「OKです。」

そして弾き始めて数分後、彼の周りには人集りができていた。

人集りはどんどん増えていき、楽人の演奏に観客たちは引き込まれていった。

…
…
…

「ありがとうございます!」

観客に感謝の言葉を伝えて演奏を終えると多くの拍手が送られた。

楽人は気恥ずかしそうに急いでキーボードを片付け足早に楽器店を去った。

「いやーえらい目あった。」

「ちよつと公園で休もう。」

幸い、公園にはブランコに座っている女の子一人しかいない。

ベンチに腰かけると春の心地よい風が睡魔を誘ってくる。

そして楽人は意識を手放した。

「そこで寝ているお兄さんとギターの子ちよつといいかなー!」

寝始めて15分ほど経っただろうか。

女の子の甲高い声で目が覚めると膝を着きながら手錠をかけるポーズをとったピンクジャージの子と金髪サイドテールの女の子がこつちを見ながら呼んでいた。

「お兄さんって俺のこと?」

「そうそう!お兄さんが枕にしているのってキーボードケースだよね!」

「お兄さんって結構キーボード弾ける?」

「まあ人並みには。」

「そっちのギターの子はどう?」

「あつ…そこそこ…」

そう返答すると女の子は困った様子で

「ちよつと今困つてて無理だったら大丈夫なんだけど…大丈夫なんだけど困つてて…」

ひとり・楽人「絶対に大丈夫じゃないやつ！」

「突然ごめんね。私、下北沢高校2年生の伊地知虹夏です。」

「2人の名前は？」

「伊地知さんと同じ下北沢高校2年生の蒼山楽人です。」

「あつ…後藤ひとりです…。」

「蒼山くんは私と同じ高校で同じ学年なんだね。」

私はA組だけど蒼山くんは？」

「B組です。」

「じゃありヨウと同じクラスかあ。」

覚えてなくてごめんね」

「大丈夫だよ」

「では気を取り直して、ひとりちゃん、蒼山くん。突然で申し訳ないんだけど今日だけライブのサポートギターとキーボードしてくれないかな！」

今日はこの後キーボードを弾くだけだったので時間は大丈夫だ。

「俺は引き受けても大丈夫だよ。」

「ありがとう！さっそくライブハウスへGO！」

ひとり（まだ何も言っていない…）

伊地知さんが先頭で俺が真ん中、後藤さんが俺の後ろに隠れるように付いてくる。

「あの…後藤さんなぜ俺の背後に付いてくるんですか？隣に来てもいいんですよ。」

「あつ…はい、私は下北沢みたいなオシャレな町は直視できないので身代わりになってください…。」

「あはは！ひとりちゃんそんな怖がらなくても大丈夫だよ。」

「出演するライブハウスも私の家だから緊張しないで！」

「あつ…はい」

「伊地知さんのご家族はライブハウスを経営しているんですね。」
「うん！最近オープンしたスターリーってところなんだけど。私は普段ドリンクバイトしてて〜」

楽人・虹夏（全然目が合わない…）

「そういえばひとりちやんと蒼山くんはバンド組んでないの？」

「俺は基本ソロで活動してるかな。ネットにカバー動画出したりライブハウスに行つて他バンドのヘルプをしてる。」

「私は普段バンドのカバーをネットにあげてます。あつ、バンドはずつと組みたいと思ってるんですけどなかなかメンバーが集まらなくて」

「へー何弾くの？」

「俺はjポップやアニソンを中心に弾いてるかな」

「私は結成した時すぐ対応できるようここ数年の売れ線バンドの曲は全部弾けます…」

「執念凄まじいね…」

「おっ！着いた。ここだよ。」

着いたライブハウスは地下に繋がっておりアングラな雰囲気がある。ういかにもロックな感じがするライブハウスだ。

後藤さんは顔面蒼白になりながら俺の制服の背中を掴んで隠れている。

???「あつ。やつと帰ってきた。」

扉の前まで階段やわ降りるとゆっくりスターリーのドアが開かれた。

あとがき

ハーメルン初投稿です。

pixivでも連載してるので興味があったら見に来てね。

感想・評価頂けたら励みになります。

初ライブ2！

??? 「やっと帰ってきた。」

扉の前まで階段を降りるとゆっくりスターリーのドアが開かれた。

「リヨウ〜！お待たせ！ヘルプのバントメンバー連れてきたよ。」

「ヘルプでキーボードを担当する蒼山です。よろしくお願いします。」

「あっ…ギターの後藤ひとりです…。」

「ジー…へえ…」

ひとり・楽人（なんか睨まれてる!?!）

「あっ！睨んでいるわけじゃないよ。リヨウは表情が出にくいのに！変人って言うのと喜ぶよ。」

「嬉しくないし…」

ひとり・楽人（嬉しそう…）

「まだ時間があるからスタジオ入って練習しよう。あと、勝手に抜け出して店長が怒ってたよ。」

「う…嘘〜早く帰ってくる前に早くスタジオ行こ！ほら2人も遠慮しないで入って入って〜。」

そう伊地知さんに促されスタジオに入った。

「これが今日のセットリストだよ！」

「今回はインストバントとしてカバー曲を数曲やるんですね。」

「どう?…演奏できそう?…」

「どれも一度は弾いたことがあったので大丈夫です。」

「

「よかった〜。ひとりちゃんはどうかな?」

「あっ…はい大丈夫です。」

「じゃあ、最初一回合わせてそこからゆったり慣らしていこう!」

伊地知さんの指示を聞きキーボードを用意していると山田さんが興味深々な顔でキーボードを見てくる。

「そのキーボード、ヤマハのMONTAGE7 WHだよ。40万

ぐらいする超お高いキーボード…。」

「よく知ってますね。父からのお下がりです。キーボードを始める時に

譲ってもらいました。後藤さんのギターも60万ぐらいする Gibson って言うギターですよ。」

「…はい…お父さんがギターやってていつも借りて演奏してます…。」
「これは期待できるかも…。」

「そういえばこのバンドのバンド名ってなんですか？」

「あーっうん…えっと結束バンドっていうの…。」

「傑作…ぷぷ」

「あーもう！ダジャレとか寒いし絶対変えるから！」

「俺は結構好きですよ。結束バンド」

「もう！3人ともーそろそろ合わせ始めるよー！準備はいい？」

「大丈夫です。」

そうして最初の合わせが始まった。

Aメロが過ぎて3人の様子を見てみるとそれぞれに個性が出てきた。

山田さんは演奏のレベルは高く自分を強く持っている自信のある演奏。

伊地知さんは基本に忠実な演奏だという印象だった。

そして後藤さん、個人の演奏のレベルはこの中で一番うまい、でもそれを掻き消すかのような周りとのタイミングのずれが致命的だった。

「ド下手だ…！」

「エーーーー…！」

「ぷぷっ」

そうして全く順調とはほど遠い初合わせが終わった。

初合わせが終わった後、後藤さんは完熟マンゴーのダンボールに身を包み、

「どうも…プランクトン後藤です…。」

と売れないお笑い芸人みたいなことを言い始めた。

「しようがないよー！即席バントなんだし。あたしだってそんなに上手くないし。」

伊地知さんが引きこもってしまった後藤さんをなんとか慰めよう

としていた。

しかしどんだん段ボールの奥に沈んでいく。

「後藤さんはリードを聞いて合わせられる?」

そう聞くと後藤さんはひよこっつと顔を出して少し頷く。

「OK。じゃあヘッドホンをつけてリードだけを聞こう。」

「リードだけ?」

「うん、それ以外の音は一切聞こえないけどそれに合わせれば演奏のタイミングは問題ない。リードはキーボードの俺が担当してまだ演奏に合わせられる山田さんと伊地知さんもキーボードに合わせる。付け焼き刃だけど。」

「伊地知さんと山田さんのライブなのに申し訳ないけどあと30分で最低限合わせるにはこれしか無いと思う。」

伊地知さんと山田さんに視線をやると覚悟を決めたような顔で頷いてくれた。

「ありがとう。本番ギリギリまで合わせよう」

そしてなんとか付け焼き刃ながら合わせることに成功し、本番でも拍手をもらえるぐらいの演奏ができた。

「急造の即席バンドだったけどなんとかなったねえ。」

伊地知さんはライブ後嬉しそうに言ってくれた。

「ぼっちもよくやってくれた褒めて遣わす。」

そう言いながら後藤さんの首をわしゃわしゃと撫でている。

「うへへへへへへへへへへ…」

「ちよつとリョウくひとりちゃんにそんなデリケートなあだ名は…」

「ぼっ…ぼぼぼぼぼ…ぼっちです!」

伊地知さんが止めようとするが当の後藤さんは嬉しそうだ。

「なんか涙出てきた…」

「よーし今日はぼっちちゃんと蒼山くんの歓迎会兼反省会するぞー!」

「ごめん眠い。」

「きよつ今日は人と話過ぎたので帰ります…」

「え!?!」

「結束力全然ない!!」

断られると思っていなかったのか伊地知さんは少し落ち込んだ顔でこちらを見てきた。

「楽人くんはどうかかな?」

まるで捨てられた子犬みたいに少し震えて上目遣いでこつちを見てくる。

この子普段から男子をこうやって勘違いさせてきたのではなからうか。

などと考えていたら伊地知さんは怪訝な顔で見ている。

「歓迎会はまた別日でやって覚えている内に反省会だけやりましょう。」

「うん! そうしよう! じゃあ反省会やつちやおう…つて居ない!」

「え!?!」

いつの間にか後藤さんと山田さんの姿は跡形もなく消え去っていた。

「うーん。とりあえずお腹すいたからどつか食べに行こ!」

「あつ…はい。」

そうして反省会（4人中2人欠席）が急遽始まった。

反省会ー！

STARRYから出て夜の下北沢を散策することになった。

「うーん。とりあえずお腹すいたからどつか食べに行こー！」

「伊地知さんは何か食べたいものとかある？」

「そういえば最近オープンした洋風カレーが美味しい喫茶店が出来たからそこ行きたいかも。」

あと、「伊地知さん」じゃなくて「虹夏」って名前で呼んで欲しいな。」

「どうして？」

「お姉ちゃんと呼ぶ時と同じだし、ちよつと距離を感じちやうからかな。私も「楽人くん」って呼ぶからー！」

「了解。これからよろしくね、に…虹夏ちゃん。」

「かしこまりー！楽人くん！たはは…男の子の友達あんまりいないからちよつと照れるね〜。」

そんなこと言われるとこっちまで妙に意識してしまう。気を紛らわせるために虹夏ちゃんに問いかけた。

「虹夏ちゃんってバンドで達成したい目標とかあるの？」

そうすると一瞬、虹夏ちゃんが神妙な顔になった後で笑顔で

「私はバンドが人気になって武道館とかでライブ出来るぐらいに成長することかな」

と言った。一瞬、間があったと思ったが気のせいだと考えることにした。

「バンドマンなら一度は目指す王道な目標だね。」

「楽人くんのほうはなんか音楽やって目標はあるの？」

「うーん…そうだな…俺は俺の音楽を聞いた人が笑顔になってくれるのが目標かな。」

「へー…いい目標だね！」

こんな具体性のない目標でも肯定してくれるのが純粹に嬉しいと感じた。

「ありがとう。虹夏ちゃん。」

「お店着いたよ！今日の反省会はここでやろう。」
「了解。」

そうして喫茶店のドアを開き店内に入った。

虹夏ちゃんが誘ってくれた喫茶店はレトロな雰囲気でも落ち着く店内だった。

「とりあえず注文しよっか。」

テーブル席に座りメニューを開くと洋風カレーやスパゲッティ、サンドイッチなどの軽食が目に入った。

虹夏ちゃんはトマトクリームパスタとカフェオレ、俺はオススメされた洋風カレーを注文した。

「今日は本当にありがとうね」

虹夏ちゃんは注文を終えるとそう感謝の言葉を言ってくれた。

「いえいえ、俺はただリードのところを弾いただけでしたから」

「そんなことないよ。本番直前で私たちが焦っている時に冷静に改善案を出してくれたじゃん。」

「そう言ってもらえると嬉しいよ」

「楽人くんから見えて結束バンドの演奏はどう思う？」

「うーん、これは合わせの練習の時に感じたんですけど虹夏ちゃんはサビ前に来るとドラムが走っちゃう癖があるなと感じたかな。」

グサツ…

「山田さんは一つ一つの技術は高いけど自分だけを見過ぎている癖がある。」

グササツ…

「後藤さんはバンドメンバーに合わせられないって言う根本的な問題があると思う。」

チュドーン…

「やつぱりそうだよね…私達技術面でもチームワークでもボロボロだよね…」

燃え尽きて灰となった虹夏ちゃんがそこには居た。

「でも、とつても面白いバンドだと俺は思うよ。それぞれに個性があつてお互い化学反応を起こして高め合っている。それを今日のラ

イブで感じたよ。」

「ほっ…本当?」

虹夏ちゃんが復活して喰い気味に聞いてくる。

「お世辞抜きで本当。このバンドは練習次第でとてもいいバンドになるよ。」

そう答えると虹夏ちゃんは少しいつもとは違い真剣な顔で

「楽人くん、もしよかったら結束バンドに入ってくれない?」

そう問いかけられた。

正直、魅力的な話だった。このままひとりで他バンドのヘルプに入ったり、動画をネットに上げるよりも楽しそうだと。

「でも、俺は男ですよ。メンバーのバランス的に良くないんじゃないんですか?」

そう返答すると虹夏ちゃんは少しほっぺを膨らませて

「楽人くんだからいいと思ったの!」

と少し怒ったように反論してきた。

「分かった。分かった。引き受けるよ。」

そう答えると虹夏ちゃんはムフーと満足そうに

「ありがとう…これからよろしくね!」

と返事をしてくれた。

そんなことを話していると注文した料理が運ばれてきた。

「うわー美味しそう〜」

虹夏ちゃんは目を輝かせながらイソスタで写真を撮っている。

「それじゃあ、いただきます。」

「いただきます!」

洋風カレーは普段食べるカレーとは違いエビと牛骨の出汁が効いてとても美味しかった。

そう味わって食べていると虹夏ちゃんが

「楽人くん美味しそうに食べるね。私のパスタ一口あげるから楽人くんのカレーも一口ちょうだい!」

とねだってきた。

特に困ることではないので了承して新しいスプーンで一口よそっ

て渡すとすごく美味しそうに食べている。

なんか餌付けしてるみたいで少し面白かった。

そんなことを考えてると虹夏ちゃんはフォークで一口分のパスタを巻取りこつちに向けてきた。

「ほら、楽人くんも一口。」

これはアーンをしろと言うことなのだろうか、しかも虹夏ちゃんが使ったフォークで…。

そんな邪推をしていると虹夏ちゃんは少しからかうような顔をして。

「なに〜アーンするの恥ずかしいの?」

「そういうわけじゃ…。」

「じゃあどうぞ!」

「…いただきます。」

そう、引くに引けず甘んじてアーンを受け入れた。

「どう?美味しい?」

「お…美味しいです。」

そう答えたがぶつちやけ味は全く分からなかった。

そんなこんなで料理を食べ終えて食後のコーヒーを飲んでみると

「楽人くんってよくコーヒー飲めるよね。私苦いのはダメだ〜。」

「そう?慣れたら以外と美味しいよ。まあ、俺は牛乳を混ぜるよりとそのままで飲みたい派だから。」

「えーカフェオレの方が美味しいよ〜。」

「分かった。分かった。今度また来たらカフェオレ飲んでみるから。」

「うん!また一緒に来よ!」

「そういえば後藤さんはメンバーには誘わないの?」

そう唐突な疑問を問いかけると虹夏ちゃんは

「あー忘れてたあー!!!」

と突然叫び出した。

そんなこんなで会計を済ませて店を出て帰路についた。

「とりあえずぼつちちゃんにはバンドメンバーにならないかLINEで聞いてみるね」

「危ない危ない。気づかずに終わるところだった。」

「楽人くんって家この辺？」

「そうだよ。場所で言うとな北沢高校とSTARRYの中間ぐらいかな。」

「結構近いんだね。あ、家ついた。送ってくれてありがとね！また明日学校でね。」

「お疲れ様。また明日。」

虹夏ちゃんをSTARRYまで送り帰路につくと唐突に喫茶店でのことがフラッシュバックしてきた。

「うあゝアア、可愛いすぎだろ!!」

唐突に夜道で叫んだことにより警察に職質されることになったのだった。

バンドミーティングー!

反省会が終わって翌日。

登校すると教室で山田さんが机に突っ伏して死んでいた。

「山田さん、大丈夫ですか?生きてますか?」

「……………」

し…死んでる。

もしかして、学校では話しかけるなどという意味表示なのだろうか。とりあえずそつとおこう。

そう思い話しかけるのを止めて自分の席に着くことにした。

そして1限2限3限4限が過ぎ去り昼休みになった。

山田さんは朝からずつと突っ伏したままであった。

本当に大丈夫なのだろうか。

そうすると隣のクラスにいた虹夏ちゃんがクラスにやってくる。

「リョウく楽人クン。お昼ご飯一緒に食べよ!」

朗らかな虹夏ちゃんの笑顔でクラス内の空気が浄化された気がした。

「こんにちは虹夏ちゃん。お昼ご飯を食べるのは構わないんだけど山田さん死んでるよ?」

そう虹夏ちゃんに言うとき山田さんを見た虹夏ちゃんは呆れた顔で

「あーこれはご飯を食べてなくて死にかけているだけだから。」

「え…朝ごはん食べていないんですか?」

そうすると山田さんはのっそりと体を起こして

「ううん…二日前から何も食べてない…。」

「なんで!?!」

そんなにご飯がたべれないほど生活が苦しいのだろうか。

「リョウの家はお金持ちなんだけど貰ったおこずかいやバイト代を全部楽器につき込んでじゃうからいつも金欠なんだよ。」

「自業自得じゃないですか!」

そうツツコミすると山田さんは虹夏ちゃんに手をのばして

「虹夏、ごはんちょうだい…。」

とお昼ご飯をせがんでいた。

「あーごめんね。今日は忙しくて購買なんだ。」

「え・・・」

虹夏ちゃんが山田さんに与える飯がないと言うと山田さんの顔が青ざめ、絶望の表情を浮かべた。

「私は今日、餓死して土に還る・・・。」

そんなことを言って背を向けてしまう。

その背中からはとんでもない哀愁が漂っている。

「もーそんな拗ねないですよ。」

虹夏ちゃんは困ったようにこっちを見てくる。たしかにこのままでは山田さんが餓死して結束バンド崩壊の危機だ。

「山田さん、もしよかったら俺の弁当半分食べない？」

そう申し出てみると山田さんは「ガバツ」と体を起こし「いいの?」と聞いてくる。

「構わないよ。でも俺が作ったから味の保証はできないけれど。」

そして、弁当の蓋に白米とハンバーグ、ウインナー、卵焼きを取り分けて山田さんに渡す。

山田さんは両手で丁重に弁当を受け取り。「いただきます。」と言って食べ始めた。

「おいしい・・・。」

「お世辞でもそう言ってもらえてうれしいよ。」

「お世辞じゃなくて本当。卵焼きは甘くて丁寧な焼き加減だし、ハンバーグは肉のうまみがギュと閉じ込められておいしい。」

そう山田さんが感想を言うと虹夏ちゃんが物欲しそうな顔でこっちをみてきた。

「へーそんなにおいしいんだ。楽人くん、私も一口だけでいいから食べさせてくれないかな?唐揚げあげるから。」

「いいよ。じゃあハンバーグと交換ね。はい、どうぞ。」

そう言ってハンバーグを箸で渡すと虹夏ちゃんは口を開けてかぶりついてきた。

「ありがとう!。(。D。(ウマー! 本当においしいね。楽人くんはい

「いお嫁さんになれるよ!」

「俺、男だよ? あと俺を貰ってくれる人は多分いないと思うよ。」

「そんなことないよ!」

「うん。わたしを養ってほしい。」

「え!?!」

「りよ... ryo... りよ... リヨウ!何言ってるの?!」

「さすがにヒモを養える能力は俺にはないよ。山田さん。」

「リヨウ」

「え?」

「山田さんじゃなくてリヨウってこれからは呼んで。」

「呼ぶのはいいけどヒモはさすがに勘弁。」

「わかった。まずは名前呼びで許してあげる。」

「もう!リヨウ、そんなに楽人くんをからかわないの!あと、楽人くんもリヨウの口車に乗せられない!」

「りよ... 了解しました。」

虹夏ちゃんからものすごい霸王色のような圧を感じる。

「虹夏はなんでそんなに怒ってるの?」

「怒ってない!」

口では怒ってないと言っているけど明らかに少し怒っている虹夏ちゃんを見てさすがに話題を変えることにした。

「そういえば虹夏ちゃん、後藤さんが結束バンドのメンバーに入ってくれる話はどうなったの?」

「え!あ... うん。昨日、ロインでお願いしたら加入してくれることになったよ。」

「そっか。メンバーが増えてよかった。」

「それでね。今日、メンバー全員で集まってバンドミーティングしたんだけどどうかな?」

「今日は何も予定入っていないから大丈夫だよ。」

「よかった。でもミーティングする場所をSTARRYにしようかと思ったんだけどお姉ちゃんが今日はダメって言われちゃってどこでミーティングしようか。」

「うーん。楽器が使えて騒いでも問題ない場所か…じゃあ俺ん家に
する？」

「え！いいの？」

「うん。俺の親父、音楽関係の仕事をやってて防音性の高いスタジオ
を家に作ったんだ。だから今日はそこでミーティングしない？」

「でも家の人の迷惑になったりしない？」

「家族はたまにしか帰ってこないから全然構わないよ。むしろいつも
家でひとりだから偶には人を呼ばないと。」

「そっか、じゃあお願いしてもいいかな？」

「OK。じゃあ後藤さんにも連絡しといて場所は駅の近くだから駅で
待ってって。」

「うん！すぐ連絡する。あ！あとリョウ。今回は強制参加だから
ね。」

「えー」

めんどくさそうにリョウさんは返事をした。

「リョウさん今日はごはん分けたのでちゃんと来てください。」

「うっ…了解…。」

なんとか昼食をダシに参加を確約させた。

「よし！今日の放課後は楽人くんの家でバンドミーティングするで
決定！それじゃあ、また放課後にね。」

「うん。またあとでね。」

そう返事をしてちょうどチャイムが鳴り虹夏ちゃんは教室に戻っ
ていった。